

<附属学校園コラム> 附属中学校

「やりくり」の軌跡

山根隆洋

1 はじめに

社会の変化は激しさを増し、子どもたちは職業だけではなく生き方の選択においても予測困難な時代を迎えている。そんな時代の学校教育は、「社会の変化にいかに対処していくか」を最終目標にしては難しさが増すばかりである。子どもたちが変化を前向きに受け止め、自分たちの生き方、生活をより豊かに、より人間らしくするために感性を發揮し、自分たちの新しい未来の姿を構想し実現していく力が求められている。

鳥取大学附属中学校(以下、本校とする)では、この新しい時代に子どもたちに求められる力を作り上げるために「やりくり」をキーワードにして長年研究を続けてきた。本校に赴任して「やりくり」というキーワードのもとに教育研究に取り組む教員にとって、最初にぶつかる課題は『『やりくり』って何?』である。ところが、解はない。よりよい理解、解釈があるだけである。しかも、それを「よりよい」とする根拠も自分たちで作りに上げていくしかない。つまり、1年目の教員だけではなく5年目の教員も、生徒と自分の実感をたよりに試行錯誤を続けているのである。これはまさに、新しい時代に子どもたちに求められている力であろう。本コラムでは生徒とともに学び合うなかでつくってきた「やりくり」の軌跡を紹介したい。

2 「やりくり」って何?

現在、本校で使われている「やりくり」という言葉のはじまりは、平成25年度研究紀要にあると思われる。平成25年度研究テーマは『豊かな人間性を育む授業の創造～「たくましさ」と「しなやかさ」の育成～』である。その「たくましさ・しなやかさ」が見て取れる活動として、「よりよいものを目指してやれることをあれこれと考え、選ぶ、といったちょっとした工夫」をあげ、そういう行動の積み重ね、繰り返しを「やりくり」と表現している。



平成26年度研究テーマは『豊かな人間性を育む授業の創造～「やりくり」のたとえば～』として、副題の中に「やりくり」という言葉が登場する。豊かな人間性の核心と位置づける「たくましさ、しなやかさ」を身につける作法として「やりくり」というキーワードが取り上げられる。この「やりくり」の実践の中から見えてきたものとして、

「現前の事物」を「今まで工夫が重ねられてきたもの」と見るが、「完成したもの」とは見ない。「これからも工夫で変化していくもの」とみなす。そしてその工夫に自身が関われないか、と考える生徒を育てる。「やりくり」の力は、身近なことから、身の丈の方法で、生活を変える力であり、社会を変える力(市民的態度と能力)につながる

(平成26年度研究紀要 齊藤隆彦研究主任)

ことを挙げている。現在の学習指導要領の「主体的に学ぶ力」につながるものが「やりくり」の考え方の中にはあると思われる。

また、平成 27 年度以降の研究の中では「やりくり」を行う上で大切にされるポイントが具体的に挙げられるようになった。

特に重要視されているのが「正解のない問い」「非定型の問い」の設定である。解がない、あるいは解が一つではない問いを言う。平成 28 年度に藤村宣之先生の指導をいただくようになってからは、答えが一つに決まらない、あるいは答えを求めるのにいくつも方法があるという意味で「非定型の問い」という言葉を使うようになっていく。

そのような「非定型の問い」を設定するには、生徒の試行錯誤を見守ることも大切にされてきた。答えを要領よく見つけようとする力を育てようとするのではなく、「やりくり」しながらより良い解を探し求めていく力をつけようとする。

また、生徒同士が知恵を持ち寄ることも大切にされてきた。「やりくり」授業は協働学習の形をとることが多いが、持ち寄った知恵により、教科間の知恵をつなぐだけでなく、教科と教科外の知恵をつなぐことも大切にされた。授業の中だけではなく、生活への広がりもあったのである。修学旅行での動き、生徒会活動での動きなど、生徒たちは「やりくり」の力で豊かなものを作ってきた。

3 「やりくり」の作法は「学び合う場」の作法

「やりくり」を仕組む教員の学びも重要である。令和 2 年度の研究では「やりくり」を仕組む教員の意識調査を行った。(令和 2 年度 中尾尊洋研究主任)



調査の中では、教員を「やりくり」に対して低意欲的な群と高意欲な群に分けた。それぞれの群の記述解答の中に出てくる語句を分析したところ、低意欲群では「広げる」「与える」「見極める」といった語句の使用が頻度高く見られ、教員の動きを主体に着目しているのではないかと分析した。また、高意欲群では、「自然」「流れ」「意欲」と言った語句の使用頻度が高く、生徒の活動や思考の流れを主体に着目していると思われる結果であった。

「やりくり」授業の実践は、生徒に効率よく解答に到達する道を教えることではない。解答が一つに決まらない、もしかしたら解答がないかもしれない問いに、工夫しながら、主体的に取り組む力をつけることを大切にしているのであるから、教員も生徒が主体となるとはどういうことかを考え、実践していくことになる。「やりくり」授業の実践には、教員自身がどう「やりくり」していくかが問われているとも言える。従来のように、基礎基本がきちんとできてから思考力を作っていき・発揮していき、というような手法では、どうしても教員の「教え込む」という部分が重視される。「やりくり」においては自分の手持ちの知恵、仲間の持っている知恵をもとに基礎知識・基本技術というようなものを習得しながらより良いものを求めていくことが大切にされる。教員自身が自分を変えていかなければならない部分は大変大きいし、そこにこそ学び合う場としての学校における「やりくり」が存在すると思われる。



4 おわりに

「やりくり」をキーワードとした研究の成果は本校研究紀要を是非ご覧いただきたい。

昨今のコロナ禍においては、人とつながる教育活動がさまざまに制限される中で、生徒も教員もまさに「やりくり」しながらよりよいものを求めてきた。本校運動会では、「熱中症対策として運動中はマスクをしない、コロナ対策としてマスクをしていない時は声を出さない」という制限の中で、新しい形の大縄跳びを生み出したことなどは生徒たちの「やりくり」の力が育っていることの、小さな証拠になるかもしれない。また、コロナ禍と大学入試改革の二つの波の中で大学受験に向かっていった本校卒業生の保護者から「附中で培った『やりくり』の力でしっかり乗り切っていました。」という言葉が聞けるようになった。



これからの世界を生き抜く市民としての力をつくろうと、本校は「やりくり」をキーワードに研究を進めてきた。より良いものを求め、試行錯誤し、自分たちでより良いものを作り上げていく、という「やりくり」の作法が生徒の中に根付いていることを、今本校の生徒たちの中に見ることができるのである。

山根隆洋（鳥取大学附属中学校副校長）